

# サヴィンコフを読む大佛次郎と アルベール・カミュ

千々岩 靖子

ボリス・サヴィンコフ（1879-1925）は20世紀初頭のロシアで活躍した革命家/作家である。革命の手段としてテロリズムを採用した「人民の意志」派の流れをくむ社会革命党（通称エス・エル）のテロ組織「戦闘団」の副指揮官として、数々の要人暗殺を計画・実行したサヴィンコフは、ロープシンという筆名を用いて自身のテロリストとしての熾烈な体験を題材にした小説を執筆しただけでなく、19世紀末から20世紀初頭にかけて活動した多くの帝政ロシアの革命家たちがそうであったように、回想録も残している。処女小説『蒼ざめた馬』（1909年）をはじめとする彼の小説作品が、しばしばテロリストの内面の葛藤に焦点が当てられているのとは対照的に、1926年に出版された『テロリスト群像』において、サヴィンコフはそれまでの「戦闘団」における自身の活動を詳細に辿りつつ、共に闘った同志たちとの交流や彼らの献身を——この書は回想録であると同時に「自ら死を選んだテロリストたちへの手向けの記録<sup>1)</sup>」でもある——、手紙や党の機関紙、新聞、裁判記録などの資料を適時引用しながら、感傷を交えることなく客観的に記述している。

この『テロリスト群像』に着想を得て作品を執筆したのが、『鞍馬天狗』シリーズで名を成した「大衆作家」大佛次郎（1897-1973）と、『異邦人』（1942年）や『ペスト』（1947年）で知られるアルジェリア出身のフラン

---

1) 川崎浹「解説」（サヴィンコフ『テロリスト群像』川崎浹訳、現代思潮社、1967年、p. 420.）

ス人作家アルベール・カミュ（1913-1960）である。大佛は、『テロリスト群像』第一部第二章で語られる、1905年のセルゲイ大公暗殺の実行犯イワン・キャリアエフ<sup>2)</sup>を主人公にした短編『詩人』を雑誌『改造』（1933年5月号）に発表、そして大戦直後の1946年には、『テロリスト群像』の最終章で明かされる「戦闘団」の指導者エヴノ・アゼフの裏切り——アゼフは「オフラナ」（帝政ロシアの警察組織）のスパイとして暗躍し、国家と革命の双方を裏切っていた二重スパイであった——を小説化した『地霊』を雑誌『朝日評論』に連載した<sup>3)</sup>。一方カミュは、同じくキャリアエフの大公暗殺を題材にした戯曲『正義の人びと』（*Les Justes*）を1949年12月15日に上演している。帝政ロシアのテロリストたちに対するカミュの関心はそれだけにとどまらない。戯曲上演の前年に、すでにカミュはキャリアエフやサヴィンコフをはじめとする「戦闘団」のテロリストたちを「心優しき殺人者たち」（« *Les Meurtriers délicats* »）と題する短いエッセイで紹介し（1948年1月『ターブル・ロンド』誌に掲載）、さらに同エッセイに若干の修正を施したうえで『反抗的人間』（*L'Homme révolté*, 1951年）にも収録している。

互いに面識のない日仏の作家二人が、ともにサヴィンコフの『テロリスト群像』、とりわけその第一部第二章で早々と絞首台に消えるキャリアエフに魅了され、この若きテロリストを主人公にした作品を残したことは興味深い。しかしながらキャリアエフを描いたこれらの著作に関しては、カ

---

2) 大佛次郎は「カリエイエフ」や「カリヤエフ」など記載しているが、煩雑さを避けるためにこの論文では、著作からの引用を除いて「キャリアエフ」で統一する。

3) 『地霊』執筆に際して大佛が参照した資料は、『テロリスト群像』に加えてボリス・ニコライエフスキー『大スパイ：革命のユダ』があげられる。のちにも言及するが、大佛はこれらの二冊の著作に関しては英語訳を使用している。（Boris Savinkov, *Memoirs of a terrorist*, translated by Joseph Shaplen, with a Foreword and Epilogue, Albert & Charles Boni, 1931; Boris Nikolajewsky, *Assef the Spy: Russian Terrorist and Police Stool*, translated by George Reavey, Doubleday Page and Company, 1934.）

ミュの『正義の人びと』が提示する倫理的問題が着目されることはあっても<sup>4)</sup>、大佛やカミュが『テロリスト群像』をどのように活用してそれぞれの自作に取り込んだのか、また両作家が描き出すキャリアエフ像にどのような差異があるのかといった点に関心が向けられることはない。たしかに『詩人』も『正義の人びと』も同じ歴史的事件を素材にしているという限りにおいて、『テロリスト群像』の内容を概ね反復している——どの作品におけるキャリアエフも、子供が馬車に同乗していたため一旦爆弾を投げるのを断念しながらも、最終的にはセルゲイ大公の暗殺を遂行し、死刑に処されるという悲劇的な運命をたどっている。しかしながら、『詩人』や『正義の人びと』におけるキャリアエフは、『テロリスト群像』で語られるキャリアエフと完全には一致していない。本稿では、これら三作品のテキストを照らし合わせ、大佛とカミュの執筆の背後にある時代的コンテクストを考慮に入れることで、それぞれのキャリアエフ像の差異を浮き彫りにすることを試みる。

## 1. 大佛次郎『詩人』

大佛の『詩人』の存在をカミュは生涯知ることはなかったが、他方大佛はカミュが同じ主題で戯曲を書いたことを知る。1972年に出版された『大佛次郎ノンフィクション全集』のために執筆された「あとがき」の中で、大佛は以下のように述べている。

---

4) 代表的な日本の評論として、埴谷雄高の「暗殺の美学」（初出：『中央公論』1960年12月号）と高橋和巳の「暗殺の哲学」（初出：『文藝』1967年9月号）が挙げられる。とりわけ埴谷雄高はカミュ『正義の人びと』のキャリアエフに特権的地位を与えて、以下のように述べている。「ボリス・サヴィンコフの『一テロリストの回想』のなかから彼を取りだして大佛次郎は小説『詩人』を書き、またアルベール・カミュは五幕の劇『正義の人々』を書いたが、人類の歴史のなかにおける果てしなき殺人の意味を執拗に追求しつづけたカミュに取りあげられることによつて、この人物の行動は微妙な奥行きを持つ深い陰影と意味づけを与えられ、彼が謂わば無意識の裡に志向していた暗殺の美学はついにひとつの堅固な骨格を備えて私達の前に提出されることになったのである。」（埴谷雄高「暗殺の美学」、『埴谷雄高全集第5巻』、講談社、1998年、p. 365.）

「詩人」は私の好きな作品である。同じ題材を、後年になってアルベール・カミュが戯曲に描き、日本でも民芸が上演した。しかし、キャリアエフについては先に出発した私のほうがよく書けたようである<sup>5)</sup>。

ここでの「よく書けた」という表現に込められた大佛の意図は正確にわかりかねるが、もしそれが「大佛の描いたキャリアエフの方が『テロリスト群像』により忠実である」という意味であるならば、大佛の指摘は正しい。たしかにカミュは、一方でキャリアエフの行動や性格に関する描写の多くを、『テロリスト群像』の第一部第二章までに語られる多くのエピソードから借用しながらも、他方で自分の戯曲が歴史的事件を正確に再現した「歴史的戯曲」« *pièce historique* »ではないことを明言している<sup>6)</sup>。こうしてカミュは、登場人物の名前を一部変更し、ステパンやスクラートフといった虚構の人物をあらたに創造し<sup>7)</sup>、キャリアエフとドーラの恋愛<sup>8)</sup>、キャリアエフとステパンの論争など、『テロリスト群像』にはなかった設定や場面を付け加えている<sup>9)</sup>。

- 
- 5) 『大佛次郎ノンフィクション全集第2巻』, 朝日新聞社, 1972年, pp. 401-402.
- 6) Albert Camus, *Œuvres complètes III*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2008, p. 57. カミュのテキストの日本語訳に関しては、基本的には拙訳であるが、既訳がある場合はそれを参照しつつ訳出した。
- 7) 戯曲において、ボリス・サヴィンコフ (Boris Savinkov) はボリス・アネンコフ (Boris Annenkov) に、ドーラ・ブリリアント (Dora Brilliant) はドーラ・ドゥルボフ (Dora Doulebov) に変更されている。実在の人物の名前をそのまま使用しているのはイワン・キャリアエフだけである。
- 8) 『テロリスト群像』において、キャリアエフとドーラは単なる「戦闘団」の仲間であり、恋愛関係にはない。
- 9) ちなみにカミュの戯曲作品はすべて翻案である。『カリギュラ』(1945年初演)はスエトニウスの『ローマ皇帝列伝』を、『誤解』(1944年初演)は東欧で実際に起こった事件を報じる新聞記事(小説『異邦人』第二部で、ムルソーが独房で藁布団の下に見つけた古新聞の切れ端に書かれていた殺人事件と同じである)を、『戒厳令』は自身の小説『ベスト』の翻案である。『正義の人びと』上演後の1950年代も、カミュはドストエフスキー『悪霊』をはじめとした様々な作品の戯曲化に取り組んでいる。

時には『テロリスト群像』のエピソードや発言を文字通りそのまま戯曲に取り込みながらも、想像力を用いて比較的自由に改変を加えたカミュの戯曲とは対照的に、「ノンフィクション」短編の『詩人』において、大佛は『テロリスト群像』の一人称「私」を「サヴィンコフ」に変更したことを除けば、人名や地名などをそのまま使用している。だが大佛の原作に対する忠実さはそれだけにとどまらない。

ある男が大公の馬車を待ち伏せしている『詩人』冒頭の場面は、大佛の創作——もちろんサヴィンコフの回想録を脚色したもの——であるが、その男の正体がキャリアエフであることが明らかにされた後、以下のような文が続く。

今度の計畫のモスクウの指揮者は、「蒼ざめた馬」の作家のサヴィンコフであつた。自分がこゝに紹介する挿話も、彼の回想録に依つたものであるが、サヴィンコフはこの晩に先立つ數日前にカリエイエフに會つた時の話を傳へてゐる<sup>10)</sup>。

この引用における「自分」は筆者である大佛を指しており、「彼の回想録」とは『テロリスト群像』である。このように、大佛は『テロリスト群像』を参考にして短編を執筆していることを作中堂々と明らかにするのであるが、これ以降詳しく語られる、セルゲイ大公暗殺に関する「挿話」の多くの部分は、『テロリスト群像』からの引き写しで構成されている<sup>11)</sup>。より正確に言えば、大佛は1931年に出版された英語訳<sup>12)</sup>を日本語に訳出し、

---

10) 大佛次郎『詩人』、『改造』1933年5月号, p. 197.

11) 『改造』に掲載された『詩人』では、『テロリスト群像』に加えて、セルゲイ大公暗殺事件の直前に起こった「血の日曜日事件」を描いたゴーリキー「一月九日」からの引用もある（『ゴーリキー全集第3巻』改造社, 1931年）。しかし「一月九日」から引き写した部分は、戦後以降に出版された版では削除されている。

12) 大佛が1931年に出版された英語訳を参考にしたという事実は、大佛次郎記念

自作にほぼそのまま取り込んだのである<sup>13)</sup>。『詩人』がいかに『テロリスト群像』の英語訳テキストと酷似しているかを示すために、先に引用した箇所直後の文章、つまり大佛が「サヴィンコフの回想録に依って」読者に伝える「挿話」の冒頭を引用する。

カリエイエフは死期が迫つたのを既に感じてゐる様子であつた。この自覺から、絶えず神経的な興奮状態にゐた。この數日間ほど、彼が[党に対する愛着と熱情とを]口に出して云つたことはない。

私は我々が暗殺を執行すると決議した一月末に、當時まだ辻馬車駆者の服装のまま、でいた彼と會つて話したことがあつた。ザモスクヴォリエチエ區の薄汚いレストランで話したのである。カリエイエフはめつきり瘠せていたし、鬚を蓬々と生やしてゐた。澄んだ色の目も奥深くくぼんでいる。紺色の上衣に赤いスカーフを襟に巻いてゐた。「ひどく疲れてゐるんです。」と、彼は自分のことを云つた。

「神経が彫のように成つてゐるんですね。精一杯なんです。けれど、首府でウラヂミルを、こゝでセルギウスをやれ、ば………………。そんな日の來るのを待つてゐるんです。考へて御覽なさい、七月十五日、一月九日、それから、すぐと、この二つなんだ！[僕は随分待つていた。それが革命なんだ、] それが見られないのだけが残念です。」

ちよつと黙り込んでから、また云つた。「モイエセンコは倅せですね、あの男は冷靜にやれる。僕にはそれが出來ない。セルギウスをやって了つてからでないと樂になれないのです。(中略) 失敗したら、どうするか?あなた、どうするか知つてゐますか?僕は[日本人]の流儀で始末したいと思つてゐるんです。」

「どう云ふんだつて?」

---

館に問い合わせて確認した。

13) サヴィンコフの回想録の日本語訳『テロリスト群像』(現代思潮社)が出版されるのは1967年である。

「[[日本人] は戦場へ出て決して敵に降ることがないのです。[ハラキリ] をするんです。」<sup>14)</sup>

この『詩人』の一節のもとになったと思われるのが、『テロリスト群像』の以下の英語訳である。

**But he already sensed the approach of his end, and this premonition was reflected in his constant state of nervous enthusiasm. Perhaps at no time did he express such passionate love for the organization as in these days, directly preceding his death.**

**I saw him for the last time in the guise of a cab driver at the end of January, when we had decided to perform the assassination. We were together in a dirty restaurant in the Zamoskvorietchye district. He was thin, with thick beard, and his limpid eyes had sunk deep into their sockets. He was in a blue overcoat, with a red scarf around his neck. He said:**

**“I am very tired...my nerves are frayed. You know, I think, I can’t go on any longer, but how happy we will be if we win, if Vladimir is killed in St. Petersburg and Segius in Moscow. I am waiting for that day. Think of it: July 15, January 9, then two acts in succession. This is revolution. I am sorry I will not live to see it.”**

**“Opanas (Moiseyenko) is happy,” he continued after a minute’s silence; “he can work calmly. I can’t. I will be at peace only when Sergius is dead. If only Yegor were with us. What do you think**

---

14) 大佛次郎『詩人』, 前掲書, pp. 197-198. 本論では雑誌『改造』に収録されたテキストを使用しているが、この原稿は検閲によって削除されている箇所があるため、『大佛次郎ノンフィクション全集第2巻』(1972年)に収録されたテキストを参照し、削除された箇所を補った。補足箇所は角括弧で示している。

— will Yegor know about this, will Gershuni? Will they know in Schluesselburg? As you know, I do not recognize the past. I know only the present. For me Alexis is not dead. For me Yegor is not in Schluesselburg. They are with us. Don't you feel their presence? **But what if I fail? You know what? I would rather finish it all in Japanese style...**"

**"What do you mean?"**

**"The Japanese do not surrender in battle."**

"Well?"

**" They commit hara-kiri."**<sup>15)</sup>

両テキストを比較すると、大佛は「(中略)」を除いて——奇妙なことに大佛はわざわざ『テロリスト群像』の文章を「省略」したことを示しているのだ<sup>16)</sup>——英語訳を丁寧に訳出し、ほぼ忠実に書き写していることがわかる。しかも、英語訳の二段落冒頭の一人称「I」はサヴィンコフ自身を指しているので、『詩人』に取り込むためには「サヴィンコフ」に変更しなくてはならないのに、そのまま「私」と記すミスをおかしてさえいる。

続いてもう一つの例として、サヴィンコフが大公の殺害に遭遇した場面を引用する。

サヴィンコフは、ドラとクツネツキ橋の近くにある菓子屋で會う約束をしてゐた。そこへ行つてドラを連れ出して爆裂弾の投げられるまでに、クレムリン宮の附近へ引返して來るつもりであつた。

15) Boris Savinkov, *Memoirs of a terrorist*, op. cit., pp. 96-97. 大佛が自作に取り込んだ箇所は太字にした。

16) この「(中略)」に関してはすでに平野謙が注目している。平野はこの破格な書き方のうちに大佛が原典に忠実であろうとした意欲を読み取っている。(平野謙「解説(「詩人」「地霊)」,『大佛次郎ノンフィクション全集第2巻』,前掲書, p. 417.)

橋を渡らうとする時、どこか遠いところで物にくるんだやうな音響が聞こえた。しかしこれがダイナマイトの爆発だとは感じられなかつたので、そのまま歩いて行つて、ドラを探した。

ドラは菓子屋にゐた。二人はツベルスカヤ街に出てクレムリン宮の方角へ歩いて來た。

イヴェルスカヤ街まで來ると、町の子供が帽子も被らず、叫びながら走つて來た。

「太公様が殺されたあ。首が飛んでるぞ！」

人が走り出してゐた。戸口と云ふ戸口から人間が吐き出されて、道路の上を眞黒に塊つてクレムリン宮の方角へ走つて行くのである。サヴィンコフとドラは、ニコルスキイ門のところまで行つた。その附近は既に人で埋まつてゐて通抜けることも出来なかつた<sup>17)</sup>。

**I had an appointment with Dora Brilliant in a pastry shop on Kuznetzky Bridge and was hurrying to meet the appointment in time to return to the Kremlin at the moment of the explosion. When I reached Kuznetzky Bridge I heard a muffled sound in the distance, but paid no attention to it because it did not seem to me like the detonation of an explosion. I met Dora in the pastry shop. We walked out to the Tverskaya and in the direction of the Kremlin. At the Iverskaya we were met by a street urchin, without cap, shouting:**

**“The Grand Duke has been killed. His head was torn off.”**

**Crowds of people were running toward the Kremlin. At the Nikolsky gate the crowd was so large it was impossible to pass. Dora and I stopped<sup>18)</sup>.**

---

17) 大佛次郎『詩人』、前掲書、p. 206.

18) Boris Savinkov, *op. cit.*, p. 105.

細かく検討すると小さな違いはいくつかあるが、大佛のテキストのほとんどが英語訳を日本語に訳したものであることがわかる。こうした「引き写し」の箇所は枚挙にいとまがないため、大佛の『詩人』は翻案という枠を超えた剽窃ではないかと批判する人もいるかもしれない<sup>19)</sup>。ただし本稿の目的は大佛の『詩人』が翻案であるのか剽窃であるのかを判断することではなく、その是非を問うことでもない。むしろここで指摘したいのは、『詩人』を構成するテキストのほとんどが『テロリスト群像』の引き写しでありながらも——『詩人』が批評対象として注目を浴びることがほとんどないのはこのせいかもしれない——、両作品のキャリアエフ像が読

19) 1967年に日本語訳『テロリスト群像』が出版された直後、大佛の『詩人』が『テロリスト群像』に酷似していることに対する批判があったことを訳者川崎渕が伝えている。その点について川崎は、才能ある小説家である大佛が自らの手腕で原文を改変することは容易いはずであり、『テロリスト群像』からの多くの引き写しは作家の怠慢によるものではないと擁護している。(川崎渕「大佛次郎の近代」、『文芸』1973年7月号, pp. 201-202.) この川崎の擁護は妥当であろう。大佛は作家デビュー以来、「鬻物」とよばれる『鞍馬天狗』をはじめとして、想像力を駆使して日本の歴史を比較的自由に解釈した時代小説を主に発表し続けていたが、1930年の『ドレフュス事件』を皮切りに、資料を用いて外国の史実を平易に語るという、大佛自身の言葉を借りれば「社会講談」の執筆をはじめており、『詩人』もその系列に含まれる。のちに『ノンフィクション全集』に収録されることからわかるように、これらの作品において重要なのは、史実をできるだけ正確に、平易に描くことである。それゆえ1905年のセルゲイ大公暗殺という歴史的事件を読者にわかりやすく伝えるために、大佛が意図的に、執筆当時は翻訳されていなかった『テロリスト群像』を資料として積極的に取り入れたであろうことは想像に難くない。また、大佛の文学活動の出発点が小説ではなく翻訳であったという事実も見逃せない。一高時代にフランス語を選択し、ロマン・ロランの熱心な読者であった大佛は、小説家としてデビューする以前に、ロランの『先駆者』(1921年)『クルランボオ』(1922年)、『ピエールとリュス』(1924年)の翻訳を相次いで刊行している。

ただし川崎の大佛に対する擁護に関しては疑問も残る。川崎は大佛を擁護しながらも、1967年の単行本『テロリスト群像』(現代思潮社)および2007年に出版された岩波現代文庫版の解説、そして1969年に出版されたサヴィンコフ『牢獄』(白馬書房)の解説として収録された充実した評論「サヴィンコフ=ロープシン論」において、川崎はカミュの『正義の運び』について語り、サヴィンコフの著作と比較することはあっても、同じ事件を扱った大佛の『詩人』に言及することは一度もない。この沈黙は、川崎が『大佛次郎ノンフィクション全集第2巻』(1972年)に収録された『詩人』と『地霊』の註釈作成を担当しているだけに、いっそう不思議に思われる。

者に与える印象が必ずしも同じではないという点である。当然ながら『詩人』のテキストのすべてが『テロリスト群像』の引き写しというわけではない。大佛は、『テロリスト群像』の英語訳を読みながら訳出する箇所を取捨選択し、ほとんどの場合はそのまま書き写しながらも、ある時は加筆し、ある時は要約しながら『詩人』を執筆している。このような操作によって、結果的に『テロリスト群像』とは異なるキャリアエフ像が提示されているのだ。

こうした文学的操作のひとつとしてまず指摘したいのが、大佛が『テロリスト群像』から「取り入れることのなかった」キャリアエフに関する記述である。「戦闘団のメンバーは、組織活動に惜しみなく献身できる人物であり、いかなる場合にも自己の生命を擲つ覚悟のできている人物でなくてはならない」という規約草案が「厳格な条件」として要求されているように<sup>20)</sup>、「戦闘団」のメンバーは、テロに革命成就の唯一の可能性を見出し、その実現のために自己の命を捧げることのできる、多かれ少なかれ狂信的な人々である。中でも「危険を冒すことにかけて、ぼくは他の連中にひけをとりたくない<sup>21)</sup>」と発言するキャリアエフは、最も純粋なテロリストとして描かれている。「犠牲への燃えるような希求<sup>22)</sup>」に突き動かされ、「世界の議会をひっくりめた以上に、テロを信じている<sup>23)</sup>」とまで断言する「詩人」キャリアエフについて、サヴィンコフは以下のように書いている。

彼[キャリアエフ]をごく親しく知っている人には、芸術と革命に対する彼の愛が、同じ一つの炎、ひそやかな意識されない、しかし深く

---

20) サヴィンコフ『テロリスト群像(上)』川崎淡訳、岩波現代文庫、2007年、p. 123.

21) 同書、p. 35.

22) 同書、p. 53.

23) 同書、p. 133.

力強い宗教的感情から出ていることがわかっていた。彼は独自の道をたどってテロ活動に達し、そこに、単に政治闘争上の最良の形式のみならず、道徳上のおそらくは宗教上の生贄を見ていたのである<sup>24)</sup>。(サヴィンコフによる強調)

自らの命を単なる犠牲としてではなく、「宗教上の生贄」としてすすんで捧げようとする、革命やテロに対する彼の盲信的ともいえる揺るぎない「信仰」<sup>25)</sup>、そしてそれを支える彼のロシア民衆への愛、組織への忠誠、帝政ロシアの専制に対する憎悪と復讐の念は、『テロリスト群像』第一部第二章の最後で引用されている、同志たちへ宛てられたキャリアエフの遺書ともいえる手紙、そしてそれに続いて語られる、裁判におけるキャリアエフの弁論においても表明されている。実際にキャリアエフは裁判で自身を以下のように定義している——「私は人民の復讐者のひとり、社会主義者であり、革命家である。<sup>26)</sup>」サヴィンコフが伝えるこのようなキャリアエフの過度に狂信的な側面が『詩人』で詳しく描かれることはないし、彼の裁判での陳述場面も『詩人』にはない。

その代わりに大佛は、加筆によってキャリアエフの人道的な面を強調している。夭逝した一テロリストに過ぎないキャリアエフが、大佛やカミュをはじめとする後世の人々の関心を引いたのは、彼が1905年にセルゲイ大公に爆弾を投げて殺害したからではなく、暗殺を試みながらも、大公が乗っている馬車に子供が同乗していたため一旦投弾を断念したという、テロリストとしては極めて例外的な行動ゆえである。『テロリスト群像』に

24) 同書, pp. 52-53.

25) このことを考慮するならば、死刑執行の直前にキャリアエフが神父に対して投げかける、一見理解しにくい発言——「自分は信仰をもっているが宗教的儀式は認めない」(同書, pp. 202-203)——の真意が理解できるように思われる。ここでの「信仰」は儀式を伴うキリスト教の信仰を意味するのではなく、革命に対する信仰であると解釈することができるのではないかと。

26) 同書, p. 193.

おけるキャリアエフは、劇場へと向かう馬車の中に、セルゲイ大公だけではなくパーヴェル大公（セルゲイ大公の弟）の子供マリヤとドミートリイの姿が目に入った途端、半ば反射的に「爆弾をつかんだ手をおろして、立ち去った。<sup>27)</sup>」その自らの行動に対して、「ぼくの行動は正しかったと思う。子供を殺すことができるだろうか？<sup>28)</sup>」と発言してはいるものの、もし組織が大公以外の家族も殺す権利があるという決定を下すならば、これから大公たちのいる劇場に行き、帰り道の馬車に「誰が乗ってしようと爆弾を投げつける」とも言っている<sup>29)</sup>。

キャリアエフの内面に立ち入ることなく、彼の行動や発言のみを簡潔に語るサヴィンコフとは対照的に、大佛は、子供の姿を認めたキャリアエフの動揺や心の葛藤を詳細に描く。大佛は、『テロリスト群像』にあるキャリアエフの発言をそのまま借用するだけではなく（「ちいさい子供たちを、……誰が殺せますか？<sup>30)</sup>」）、その後、『テロリスト群像』の内容を踏まえながら、どうしても子供を巻き添えにすることのできなかつたキャリアエフの苦悩をサヴィンコフ以上に詳しく描く。

自分の失態の重大さを感じてゐながら、同時に事の已むを得なかつた理由を納得して貫はうとして焦つてゐるのである。

幼ない子供は、どんなことがあつても殺せないのだ。かう云ふかと思ふと、こみ上げて来る激情に言葉もしどろもどろに成りながら、大公の家族も共に殺す決議がしてあつたのなら自分も躊躇なくやつた筈だとも云つた。この言葉は、カリエイエフがたつた今潜つて来たばかりの鋭い遭遇に深く觸れてゐた。事実、彼は、太公と一緒に、幼い

---

27) 同書, p. 169.

28) 同書, p. 169.

29) 同書, p. 170.

30) 大佛次郎『詩人』, 前掲書, p. 201. 英語訳では「How can one kill children?」となっている。(Boris Savinkov, *op. cit.*, p. 99.)

子供たちを見ようとは全然考へてみなかつたし、子供たちの姿を見た時は凡そ事の意外のあまり茫然として了つたのは争はれない。いや、それよりも、爆弾を投げつけようとして上げてゐた手がその刹那から急に動かなくなつたばかりか、自分で意識する前に降りてゐたのだから、若し、豫め同志の決議で子供たちも容赦するなど聞かされてゐたとしたら、勿論そんなことはなかつたのではないか？

カリエイエフに取つては、その瞬間に自分の決定した態度以上に自然なことはなかつたのである。<sup>31)</sup>

さらに後の場面でも、大佛は原作を参照にしつつ、以下のように書いている。

男たち三人は、「アルプスの薔薇」と云ふレストランへ行つて、店の閉まる午前四時まで前後策を相談した。そこへ來てからもカリエイエフはまだ事件のことを繰返して話さずにはゐられなかつた。子供は殺せないのだ。しかし、興奮も、やゝ鎮まつたのであろう、同志の者が自分を非難しないでゐてくれるのが嬉しいと云つて涙を流した<sup>32)</sup>。

**We went into the restaurant “Alpine Rose” on the Sofyka. The porter would not let us in. I demanded to see the manager. After long negotiations we were admitted to a back room. It was warm here and one could rest.**

**Kaliyev livened up and in excited voice began to recapitulate the scene before the city Duma. He said he feared he committed a crime against the organization and was happy that the comrades did**

---

31) 大佛次郎『詩人』、前掲書、p. 201.

32) 同書、p. 203.

**not blame him**<sup>33)</sup>.

参考として英語訳も引用したが、二つのテキストを比較すると、英語訳のいくつかの文が省略されていることがわかるが、「子供は殺せないのだ」という一文——これが語り手の声なのか、あるいは自由間接話法によるキャリアエフの発言なのかは曖昧ではあるが——だけがあらたに加筆されていることがわかる。

さらに大佛は、キャリアエフが子供だけでなく、同じく馬車に同乗していた大公妃の命をも救っていたという事実を記すことで『詩人』を締め括っている。以下の引用は、大公暗殺遂行の後、牢屋に入れられたキャリアエフの元に大公妃が訪れた場面に続く文章である。

新聞は總督夫人の深い慈悲と、この會見に依つてカリエイエフが、犯した罪に對して宗教上の懺悔をしたと云ふ反對の事實を華々しく報道した。他人がこの美德を賞賛した時寛濶な夫人がどう返答したかは傳つてゐない。たゞ一つ明瞭なのは、夫人が憫みをかけて救はうとした不幸な魂の主が實は少し前に故意に夫人の命を助けてやつて置いて、その事實を一言も夫人に告げずに死刑台に昇つて行つたと云ふことである。このことはカリエイエフの感情では、あたりまえ過ぎて、取立て、話すのも羞しいかつたのかも知れない<sup>34)</sup>。

キャリアエフが大公妃の命を救ったという事実は『テロリスト群像』の内容と符号するのだが<sup>35)</sup>、この引用の文章はすべて大佛による加筆であり、

---

33) Boris Savinkov, *op. cit.*, pp. 101-102.

34) 大佛次郎『詩人』、前掲書、p. 211.

35) サヴィンコフは、以下のようなキャリアエフの言葉を伝えている。「彼女 [大公妃] が生き永らえたのは、戦闘団の意志、はくらの意志によるものだった。つまり団もはくも、余計な流血は避けるべく慎重に努めたからである。」(サ

とりわけ最後の文は『テロリスト群像』にはない語り手＝大佛の解釈である。先の引用にもあるように、大佛のキャリアエフにとっては、子供の命を助けることが「自然なこと」であったのと同様に、大公妃の命を助けることも「あたりまえ」なのである。このような『詩人』の結末は、『テロリスト群像』で語られるキャリアエフの最期——神父が差し出す十字架に接吻するのを拒否し、大公殺害という義務を全うできたことに満足しながら絞首台に立った——とは対照的である。他者の命を尊重し、そしてそのことを当然の行為として公言しない謙虚さをも併せもつ大佛のキャリアエフは、のちにカミュが帝政ロシアのテロリストたちに与えた「心優しき殺人者」*«meurtriers délicats»* という称号に値するのではないだろうか。

## 2. カミュ『正義の人びと』

「戦闘団」の革命家たちを扱った短いエッセイ「心優しき殺人者たち」において、カミュは『テロリスト群像』で語られる様々なエピソードの中から、彼らがテロリストでありながらも、他者の命に配慮する「心優しき」人たちであることを示す例を丁寧に拾いあげて紹介する。一年後に戯曲の主題となる1905年のセルゲイ大公暗殺にまつわるエピソード——子供が同乗していたためにキャリアエフが暗殺を断念したという事実もそうだが、サヴィンコフをはじめとする「戦闘団」のメンバーも「子供たちを殺す権利はない」と判断してキャリアエフの行動を支持したこと、またセルゲイ大公暗殺が成功した後にドーラ・ブリリアントが「自分たちが大公を殺した」と泣き出したこと——だけではない。その後、ドゥバーソフ提督暗殺を計画する際に、サヴィンコフが「無関係の人を殺すかもしれない」と考えて急行列車内で暗殺することに反対し、そしてヴロノフスキー

---

ヴィンコフ『テロリスト群像(上)』, 前掲書, p. 185.) ちなみに同様の文章は『詩人』にもある。「彼女は僕らの仲間の意志、また僕の意志で、あの芝居の晩に死なずに済んだのだからな。我々の仲間の方針では、不必要な血を流さぬように十分に注意してゐるのだ。」(大佛次郎『詩人』, 前掲書, p. 210.)

もまた、提督が妻と一緒にいた場合爆弾は投げないと断言したエピソード（第二部第一章）、その後逮捕され、収監されたサヴィンコフが牢獄からの脱走を試みる際に、将校に出くわした場合は将校を殺すが、兵隊に阻止された場合は、兵隊を撃つのではなく自分自身を撃つことに同意したというエピソード（第二部第二章）を紹介している。

このような帝政ロシアのテロリストたちの「心優しき」イメージは、『正義のんびと』においても受け継がれている。大佛が加筆によって「子供をどうしても殺せない」キャリアエフの苦悩を掘り下げて描写したのと同様に、カミュも『テロリスト群像』にはないセリフをキャリアエフに言わせている。

（とり乱して）思いもよらなかったんだ……子供たちが、こともあろうに、子供たちがいようとは。[…] ときどきいかめしい目つきをして……僕はあの眼つきに耐えられたことなんてない<sup>36)</sup>。

[…] 僕は卑怯者じゃない、怯んだわけじゃない。子供がいるなんて思っていなかった。すべてがあっという間に起こった。あのまじめな小さな二つの顔。それから、僕の手の中の、あのおそろしい重さ。それをあの子供たちに投げつけなければいけなかった。こうやって。子供たちめがけて。ああ、だめだ！どうしてもできなかった<sup>37)</sup>。

カミュは『テロリスト群像』と『詩人』にはなかった「子供たち」の表情を描くことで、彼らに爆弾を投げつけることの不可能性をより強調している。

『テロリスト群像』で描かれる以上に善良なキャリアエフ像は、カミュ

---

36) Albert Camus, *Les Justes*, in *Œuvres complètes III*, op. cit., p. 18.

37) *Ibid.*, p. 19.

の論考の邦題に含まれる「心優しき」という語のイメージも相俟って、日本におけるキャリアエフの受容に大きな影響を与えているように思われる<sup>38)</sup>。しかしながら注意しなくてはならないのは、カミュがキャリアエフを「心優しき殺人者」として倫理的に評価するのは、単純に彼が子供の命を助けたからではないという点である。「戦闘団」の革命家たちが本当の意味で「他者の命に対するかくも奥深い配慮<sup>39)</sup>」を持っているのであれば、やはり子供の命だけではなく、暗殺の標的であるセルゲイ大公の命も尊重しなくてはならないのではないか。『詩人』では問われることのないこのような問題提起<sup>40)</sup>、すなわちキャリアエフが行う「正義の名のものと殺人」

38) 例えば荒畑寒村は、社会革命党の指導者マリア・スピリドノフに関する著作に寄せた解説において、ロシアの社会革命運動とテロリズムの歴史を概観しながら、キャリアエフをスピリドノフと同じく「立派なテロリストの典型」として「卓越した例外」とであると評価している。(荒畑寒村「テロリズム随想」, スタインベルグ『左翼エス・エル戦闘史』蒼野和人・久坂翠訳, 鹿砦社, 1970年, p. 298.) また、秋山清は大正時代の社会主義者やテロリストたちについて論じた著作『やさしき人々——大正テロリストの生と死』の最終章「テロルとヒューマニズム」において、大佛『詩人』とサヴィンコフ『テロリスト群像』を引用しながら、子供の命を助けるキャリアエフが「一途なヒューマニスト」とし、大正のテロリストたちに同じヒューマニズムを見出そうとする。この章で秋山がカミュの名前を言及することはないが、「やさしき人々」というタイトルがカミュの「心優しき殺人者」をふまえていることは明白である。(秋山清『やさしき人々——大正テロリストの生と死』大和書房, 1980年, pp. 210-240.)

39) Albert Camus, « Les Meurtriers délicats », in *Œuvres complètes III, op. cit.*, p. 342.

40) 事実を客観的に伝えることを主眼とした『テロリスト群像』においても同様であるが、第一部第一章「プレーヴェ暗殺」において、サヴィンコフは例外的に次のようなエピソードを紹介している。プレーヴェ暗殺の実行犯サゾノフは、暗殺が革命のために必須であることを確信しており、そのため「『殺すなかれ』をめぐるいっさいの道徳的問題は色あせてしまった」のであるが、暗殺実行後、彼は一転する。獄中から届いたサゾノフの手紙の言葉をサヴィンコフは伝えている——「罪の意識がわたしから去ることは決してなかった」。(サヴィンコフ『テロリスト群像(上)』, 前掲書, p. 61, 73.) 前述したように、サヴィンコフはテロ行為にまつわる道徳的問題を、自身の回想録ではなく小説作品でとりわけ扱っており、カミュは1946年夏に読んだサヴィンコフの小説第二作『夢幻の人びと』(1912年)に衝撃を受けている。『夢幻の人びと』が大戦後のカミュの思索に与えた影響については拙論で詳しく論じている。Yasuko Chijiwa, « Camus lecteur de Boris Savinkov », *Albert Camus au sortir de la guerre 1944-1948*, Classiques Garnier, 2022, pp. 207-218.

そのものの倫理的正当性こそが、カミュの戯曲が提示する問題の核心なのである。

この観点からすると、第二幕で展開される、子供が同乗していたために暗殺を断念したキャリアエフの行動の是非をめぐる論争以上に重要なものが、第四幕での大公暗殺の是非をめぐる二つの論争場面であろう。第四幕において、「圧政に対して爆弾を投げたのであって、一人の人間に投げたのではない<sup>41)</sup>」と主張するキャリアエフに対して、警視総監スクラートフは言う。「爆弾を受けたのは人間なんですよ。しかも、そのひどいことしたら、目もあてられなかった。いいですか、死体がみつかったとき、頭がなかった。影も形もないんです、頭が！残っていたのは、腕一本と、それにちぎれた脚だけなんです。<sup>42)</sup>」さらにスクラートフは、一方で「子供を殺すのは名誉に反することだ<sup>43)</sup>」として子供を暗殺の巻き添えにすることを拒否しながら、他方で「専制政治を打倒するために<sup>44)</sup>」暗殺を実行したキャリアエフの矛盾を指摘する。

思想で大公を殺すことはできる、だがその思想で子供たちを殺すことはなかなか難しい。[……] そこで、ひとつ疑問が出てきますな。つまり、思想で子供は殺せないということになると、その思想は大公を殺すに値する思想なんですかね？<sup>45)</sup>

スクラートフに続いてキャリアエフの元を訪れた大公妃も、彼を追いつめ

---

41) Albert Camus, *Les Justes*, op. cit., p. 38.

42) *Ibid.*

43) *Ibid.*, p. 23.

44) *Ibid.*, p. 22.

45) *Ibid.*, p. 39.

る。大公暗殺を「犯罪<sup>46)</sup>」だとみなす大公妃は、不正の人間である大公を殺すことは「正義の行為である<sup>47)</sup>」と考える一方、子供たちを「罪がない」として助けたキャリアエフに対して以下のように反論する。

子供たちのことをご存知なんですか？ 姪は意地の悪い子です。貧しい人たちに自分で施しを持って行くのを嫌がります。貧乏な人たちに触れるのが怖いのです。そういう姪は不正ではないというんですか？ 姪は正しくない子です。あのひと [セルゲイ大公] はすくなくとも農民を愛していました。一緒にお酒を飲んでいました。それなのに、お前はあのひとを殺した。どうしたってお前も正しくありません<sup>48)</sup>。

第四幕で議論される、キャリアエフの暗殺行為の倫理的是非をめぐる問題は、カミュが戯曲のタイトルを決定する際の逡巡とも関連づけることができる。カミュは最初『有罪者たち』(*Les Coupables*) というタイトルを考えていたが、その後『無垢なる人びと』(*Les Innocents*) に変え、最終的に恩師ジャン・グルニエが提案した『正義の人びと』(*Les Justes*) を採用した<sup>49)</sup>。戯曲の原稿を丁寧に添削し、その出来ばえを絶賛していたグルニエは、1949年8月11日付のカミュに宛てた手紙で次のように助言する。

エベルト座で『無垢なる人びと』の予告を見かけました。この題名よりも『正義の人びと』の方が正確だと思います。というのも、アンチゴネーは無垢であり、サン＝ジュストは正義の人だからです。無垢は消極的な状態ですが、一方正義の人は行動し、多かれ少なかれ「正

---

46) *Ibid.*, p. 40.

47) *Ibid.*, p. 41.

48) *Ibid.*, pp. 41-42.

49) Eugène Kouchine, « Notices », in *Œuvres complètes III, op. cit.*, p. 1184.

義の側」たりうる行為をします。正義は有害となる権利を持つのです。大公の子供たちは無垢です。あなたの登場人物たちは無垢であろうとするのではなく、自分たちが正義の人であることを宣言しているのです<sup>50)</sup>。

「正義の人」は行動し、自らの正しさを宣言する——これをキャリアエフに当てはめるならば、彼が自身の正しさを示すためにおこなう「行動」とは何か。それは子供の命を奪わないという人道的行為でもなければ、セルゲイ大公という悪の権化を暗殺するという革命的正義に則った行為でもない。キャリアエフが真の意味で「正義の人」たりえるのは、彼が最終的に、スクラートフと大公妃がそれぞれ申し出る特赦を頑なに拒否し——この特赦の申し出と拒否の挿話は『テロリスト群像』および『詩人』にはない——、他方二人からの詰問を受けとめる形で人間の命を奪ったことの有罪性を引き受け、奪った命の代償として自らの命を差し出すからである。キャリアエフは、同じテロリストでありながら、「目的はあらゆる手段を正当化する」という立場をとるステパンには与しない。彼は、政治的目的の実現のために暴力が不可避であることを認めるものの（だからこそ彼はテロリストなのだ）、暴力の行使は償われて然るべきもの、つまりそのものとしては絶対に許されるべきものではないもの、正当化されてはならないものと考えている。だからこそ牢獄のキャリアエフは死を望み、彼をよく知るドーラとアネンコフも、彼が特赦を受け入れたという虚報に騙されることはない。こうしてカミュが描くキャリアエフは、殺人が「必要であると同時に許されてはならない<sup>51)</sup>」という二律背反の中にあくまでも留まり、「思想のために殺人を犯すとはいえ、いかなる思想も人間の命以上に考え

---

50) Albert Camus-Jean Grenier, *Correspondance 1932-1960*, Gallimard, 1981, p. 163.

51) Albert Camus, « Les Meurtriers délicats », *op. cit.*, p. 342.

ていない<sup>52)</sup>」ことを自らの行動で証明するのである。

### 3. 『詩人』と『正義の人びと』の執筆背景とキャリアエフ像の意義

これまで大佛とカミュがどのようにして、『テロリスト群像』をもとにしてそれぞれの作品を執筆したのか、そして彼らが描き出すキャリアエフ像にどのような相違点があるのかを浮き彫りにしようと試みたが、この差異は、両作家が作品を執筆するに至った時代背景の違いから生じていると考えられる。大佛とカミュに共通するのは、同時代の歴史的・政治的状況に対する鋭敏な問題意識であり、両者ともにこの問題意識を自身のキャリアエフ像に投影しているのである。

大正デモクラシーの興隆期に少年期と青年期を過ごし<sup>53)</sup>、「リベラリスト」と一般的に称される大佛が、それまでの比較的自由に明るい時代の空気を享受していたのとは一変して息苦しさを覚えはじめたのは、関東大震災（1923年）の二年後に成立した治安維持法がひとつのきっかけであろう。その後1928年には特別高等警察が設置され、同年3月には約一千名の共産党員が検挙される。また同年6月には、関東軍の謀略による張作霖暗殺事件が起こり、以降軍部の台頭が顕著になっていく。このような時代状況のなか、それまで鞍馬天狗シリーズを中心とした時代ものの大衆小説を執筆し、人気を博していた大佛次郎は、1930年に外国の史実を扱ったノンフィクション小説『ドレフュス事件』を雑誌『改造』に連載する。その後、1933年に『詩人』を、続いて1935年から翌年にかけて、再び19世紀後半のフランスの政治状況を描いた『ブウランジェ將軍の悲劇』を同じく『改造』に連載する。

---

52) *Ibid.*

53) 大佛は1918年に東京帝国大学法学部政治学科に入学するが、そこで当時教鞭をとっていた大正デモクラシーのオピニオン・リーダー吉野作造の授業を受講していた。（大佛次郎『私の履歴書』、『大佛次郎 作家の自伝91』所収、日本図書センター、1999年、p. 52.）

「1931年以降、軍部を中心とするファシズムが芽生えてくるのにたいして、もっともはやく敏感に、その運動傾向を把握した作家の一人は大仏次郎ではないだろうか<sup>54)</sup>」と鶴見俊輔は評価しているが、これらの戦前に発表されたノンフィクション小説はすべて、当時台頭しつつあった軍部を批判する目的で執筆されている。当時の検閲による言論統制を考えるならば——実際に雑誌に発表された『詩人』の原稿の一部は、満州事変（1931年）以降一層厳しくなった検閲によって削除されたため、大佛は『地霊』の発表を断念し、最終的に戦後に連載した<sup>55)</sup>——、軍国主義・ファシズムへと傾斜していく日本の情勢に危機感を抱いた大佛は、日本の状況を想起させる外国の史実を描くことを通じて、読者に警鐘を鳴らそうとしたのである<sup>56)</sup>。1971年8月に執筆された「あとがき」において、大佛は『ドレフュス事件』の執筆動機について以下のように回想している。

「ドレフュス事件」を「改造」に書くに当り、[...] 軍部と云うものが近代国家でどういう地位を占め、誤った場合には、如何な方向へ国そのものを曳摺って行くかを書こうとした。この昭和五年前後には、日本の軍部が政治干渉のきざしを早くも示し始めていた。国家に於ける

---

54) 鶴見俊輔「『鞍馬天狗』の進化」、『ことばと創造——鶴見俊輔コレクション4』、河出文庫、2013年、p. 82。

55) 『大佛次郎ノンフィクション全集第2巻』、前掲書、p. 401。

56) これに関連して、大佛が1933年5月25日付の『読売新聞』に、「時代に光あれ——ナチスの焚書抗議」と題する文章を発表していたことも付け加えておこう。これは1933年1月にドイツでヒトラーが政権を掌握したのち、ファシズム独裁体制を築くために同年5月10日に行った焚書事件——マルクスやフロイトをはじめとする多くの書物が「非ドイツ的」とみなされて燃やされた——に対する抗議文である。このなかで大佛は、単にナチスの暴挙を批判するだけではなく、ドイツの状況と日本の状況を重ね合わせて憂いている。「深淺の相違はあれ、僕らもまた、僕ら自身の手傷を抱いている。ここでも空気は重苦しい。[...] 世界を通じて外国のことだと自由に喋れる、国の内のことだと思ふように話せないというのは、何とも奇怪な世の中になった。」（『大佛次郎エッセイコレクション2：人間と文明を考える——水の音』村上光彦編、小学館、1996年、p. 172.）

軍の地位を、日本のように統帥権に依って「国家内の国家として」それだけ独立を許している国では、事情を十分に理解して警める必要があった。共和国のフランスでさえ、軍が国の危急を口実に制限なく意欲をほしのままにする。第三共和政下にも、幾度かこの現象が起こって国家と国民生活の危機となった。独裁の危険を示したブーランジェ將軍の場合もそれなら、ドレフュス事件も軍部は決して過つことなしとする思い上がった確信から、無実と判っている人間を犠牲に捧げて、軍の威厳を守ろうとした。この圧政に対して目醒めたフランス国民が、如何に闘ったかを、私は日本の読者に知って置いて貰いたかった<sup>57)</sup>。(筆者による強調)

続く翌年に、大佛は『詩人』の執筆動機について以下のように述べている。

「詩人」「地霊」のロシアに起こった事情について私が興味を抱いたのは、ロープシンの「蒼い馬」や、「遂に起こらなかったこと」を読んで<sup>58)</sup>、共感が目醒めたからであった。甘いヒューマニストであった私は、アゼフのような怪物が人間の中から「出る」のを知って驚きの目を瞞った。この怪物を出生させた社会的条件に注意し、日本がそれに類似しているのを知った。テロリストたちの献身的行動の純粹さにも惹附けられた<sup>59)</sup>。(筆者による強調)

57) 『大佛次郎ノンフィクション全集第1巻』, 朝日新聞社, 1971, pp. 317-318.

58) 「蒼い馬」はサヴィンコフ(筆名ロープシン)の小説第一作目の『蒼ざめた馬』を指しており、「遂に起こらなかったこと」とは、第二作目『夢幻の人びと』を指している。「遂に起こらなかったこと」は、英語訳タイトル「What Never Happened」を訳したものである。

59) 『大佛次郎ノンフィクション全集第2巻』, 前掲書, p. 401.

「怪物」アゼフを生み出した帝政ロシアの「社会的条件」が日本のそれと「類似している」と大佛が言う時、それは帝政ロシアにおける圧政と執筆当時の日本の軍部による圧政が重ね合わされている。さらに、『ドレフュス事件』の執筆理由に関する先の引用を考慮に入れるならば、19世紀後半のフランスと、20世紀初頭の帝政ロシアと、執筆当時の1930年代の日本がすべて「類似した」政治状況として重なってくる。場所も時代も異なる歴史的事件を扱った『ドレフュス事件』と『詩人』には、国家権力による弾圧に対する民衆の反抗と闘いという同一の構図を認めることができるのだ。このように考えると、「怪物」アゼフと対比され、「献身的行動の純粹さ」をもつ大佛のカリヤーエフは、民衆を虐げる専制政治という悪に対し、自らの命を賭して闘う「善良な」「正義の人」という立ち位置を占めている<sup>60</sup>。

一方、1949年に上演された『正義の人びと』は、第二次大戦後にカミュが明確に打ち出す批判、すなわち革命思想における暴力擁護・暴力肯定に対する批判と密接に結びついている。大戦直後に行われた対独協力者の肅清を「正義」の名のもとに支持したのち、暴力の行使に加担したことを深く反省したカミュがはじめてこの態度を表明したのは、1946年11月19日から30日にかけて日刊紙『コンバ』に発表された8本の連載記事『犠牲者も否、死刑執行人も否』(Ni victimes ni bourreaux) においてである。第二次世界大戦が終わったのも束の間、1946年3月5日のチャーチルによる「鉄のカーテン」演説が象徴的に示すように、東西のイデオロギー対立が刻一刻と顕在化していく中、1944年8月の終戦以来フランスの左翼陣営が真剣に議論してきた革命の成就がもはや不可能であるとカミュは断言する。そ

---

60) 雑誌『改造』掲載時の『詩人』において、大佛は、1905年1月9日に起きた「血の日曜日事件」を描いたゴーリキーの「一月九日」のテキストを引用しながら、軍の発砲によって善良な市民が虐殺される様子を詳細に伝え、帝政ロシアにおける圧政の恐怖を描いている。前述したように、この場面は以降の版では削除された。

の理由は二つある。国際化した世界情勢と原子力爆弾の脅威である<sup>61)</sup>。もしフランスが革命を起こそうとするならば（右派による革命であろうと左派による革命であろうと）、それは必ず他国（ソ連またはアメリカ）の介入を誘発し、最終的には世界規模の核戦争へと発展するリスクがあるからだ。マルクス主義の提唱する暴力革命を「現代」において実現しようとすることは、世界を破局にしか導かないとカミュは主張する。「マルクスが想定していなかった軍備の驚異的な進歩という歴史的事実を鑑み、我々は目的と手段という問題を新たに考え直さなくてはならない。<sup>62)</sup>」

「プロレタリアートの暴力」を階級なき理想の社会を実現するための「善き暴力」として容認したメルロ＝ポンティの「ヨガ行者とプロレタリア」（1946年10月『現代』誌に掲載）に対する反論としても執筆された『犠牲者も否、死刑執行人も否』において、カミュが提示するのは「肉体を救うこと<sup>63)</sup>」*« Sauver les corps »*という最も基本的なモラルである。カミュは言う。「結局のところ、私のような人々は、殺し合いのない世界ではなく […]、殺人が正当化されない世界を望むのである。<sup>64)</sup>」

正義と殺人をめぐる考察の成果として提示された『正義の人びと』のキャリアエフは、大佛のキャリアエフのような、帝政ロシアの圧政という悪と闘う「正義の人」ではない。1955年に執筆された「作者の言葉」において、カミュは自身の戯曲が持つメッセージについて次のように言う。

私はただ、行動そのものには限界があるということを示したかったのである。限界を認識し、そしてその限界を越えなくてはならない時

61) 広島に原爆が投下された二日後の日刊紙『コンバ』の社説において、カミュは次のように書いている。「機械文明は、野蛮さの最後の段階に到達したところである。」(Albert Camus, *Œuvres complètes II*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2006, p. 409.)

62) Albert Camus, *Ni victimes ni bourreaux*, in *Œuvres complètes II*, op. cit., p. 447.

63) これは連載記事『犠牲者も否、死刑執行人も否』の中の一タイトルである。

64) *Ibid.*, p. 439.

は、少なくとも死を受け入れる、それこそが善良で正義にかなった行動なのである。我々の世界は、忌まわしい顔を我々に見せている。なぜならこの世界は、これらの限界を超える権利を自らに与えながら、まず他者を殺し、決してその代償を支払わない人々によってつくられているからだ。こうして今日の正義は、あらゆる正義の抹殺者たちのアリバイとして機能している<sup>65</sup>。

この「限界」とはもちろん「殺人」のことである。革命成就のためとはいえ、キャリアエフはセルゲイ大公に爆弾を投げ、命を奪うことでこの「限界」を越えたため、自らの命をその代償として支払う。こうした正義の限界を認めることこそが、真の意味での「正義にかなった行動」としてみなされる。『正義の人びと』上演の二年後に出版された『反抗的人間』において、再びキャリアエフはとりあげられ、「節度」« mesure »を守る「反抗の最も純粋な像<sup>66</sup>」を体現する者として聖別化される。ネチャーエフ<sup>67</sup>をはじめとする、革命の名のもとに「全ては許される」と考え、暴力の行使を安易に肯定する歴代の革命家たちとは異なり、子供を暗殺の巻き添えにすることをよしとせず、さらに自らが犯した殺人が決して正当化されないことを示すために、自らの死刑を望むキャリアエフの姿を描くことを通

---

65) Albert Camus, *CŒuvres complètes III, op. cit.*, p. 58.

66) Albert Camus, *L'Homme révolté*, in *CŒuvres complètes III, op. cit.*, p. 209.

67) セルゲイ・ネチャーエフ (1847-1882) は19世紀後半に活動したロシアの革命家・アナキスト。1869年に同じ革命組織のメンバーであったイワン・イワノフを裏切り者として銃殺した。カミュは、ネチャーエフとキャリアエフを含む帝政ロシアの革命家たちに関するエピソードを集めたアンソロジー『この男は殺してもかまわない』(*Tu peux tuer cet homme*, 1950年)を自身がつくったガリマール書店の「希望」叢書から出版している。周知の通り、このネチャーエフ事件はドストエフスキーが『悪霊』を執筆する際のインスピレーション源となったのだが、カミュは1959年に『悪霊』を戯曲化した。カミュはキャリアエフの対極にある革命家としてネチャーエフを捉えており、そのように考えると、『正義の人びと』における架空の人物ステパンはネチャーエフをモデルとしていると考えることもできる。

じて、カミュは過去と現在の革命家たちのあり方を批判したのである。こうしてカミュが描くキャリアエフは、サヴィンコフのキャリアエフとも、大佛のキャリアエフとも異なる強い倫理性を帯びた人物となる。カミュのキャリアエフは、作家自身の哲学的・政治的思索の集大成とも言える「反抗」を生き抜いた革命家なのだ。

## 要旨

20世紀前半の帝政ロシアの革命家ボリス・サヴィンコフは、自身のテロリストとしての実体験をもとに執筆した回想録『テロリスト群像』を1926年に出版した。これを下敷きにして大佛は小説『詩人』を1933年に発表し、アルベール・カミュも同じサヴィンコフの回想録をもとにした戯曲『正義の人びと』を1949年に上演する。両作家はともに『テロリスト群像』第一部第二章で語られる、1905年のセルゲイ大公暗殺の実行犯キャリアエフを主人公に据えているのだが、本論では、これら三作品を照らし合わせることで、同じ悲劇的運命を辿るそれぞれのキャリアエフ像の差異を浮き彫りにすることを試みた。

ノンフィクション小説として執筆された大佛の『詩人』を構成するテキストの大部分は、『テロリスト群像』の英語訳を日本語に訳したものである。だが大佛は、『テロリスト群像』でサヴィンコフが伝えるキャリアエフの狂信的な側面を自作に取り込むことはせず、大公と同じ馬車に乗っていた子供と大公妃の命を助けたことを加筆によって強調することで、原作以上に人道的なキャリアエフ像を提示している。

カミュも大佛と同様に、子供たちに爆弾を投げなかったキャリアエフの葛藤を丁寧に描くことで、キャリアエフの「心優しき殺人者」としてのイメージを打ち出している。しかしながら『正義の人びと』が『テロリスト群像』および『詩人』と異なるのは、戯曲の第四幕が示す通り、キャリアエフによる大公暗殺の倫理的な是非が問われている点である。カミュのキャリアエフは、大公暗殺が犯罪であることを認識しており、自らの死をもって償うことでその有罪性を引き受けているのだ。

また、大佛とカミュのキャリアエフ像は、両作家の執筆当時の問題意識をそれぞれ反映している。1930年代に日本の軍部が台頭していく時代を背景に『詩人』を執筆した大佛は、キャリアエフの中に、民衆を虐げる圧政に対して献身的に闘う「正義の人」を見出した。対してカミュは、対独協力者の粛清を支持したのち暴力の行使に加担したことを深く反省し、

「暴力は不可避であると同時に正当化できない」という自身のジレンマを  
キャリアエフに投影する。カミュのキャリアエフは、第二次世界大戦後  
の作家の思索の集大成である「反抗」の体現者として神話化されている  
のだ。